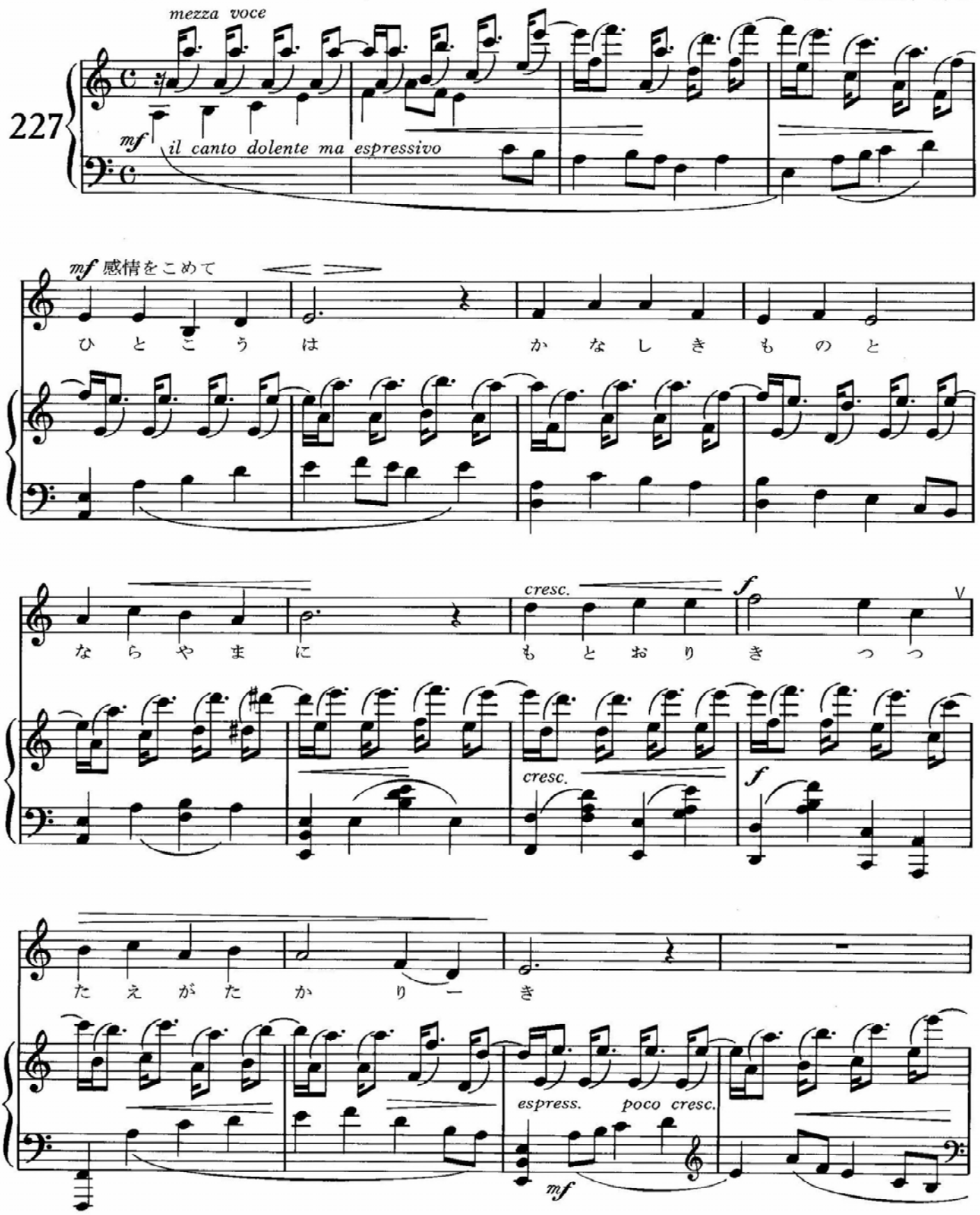
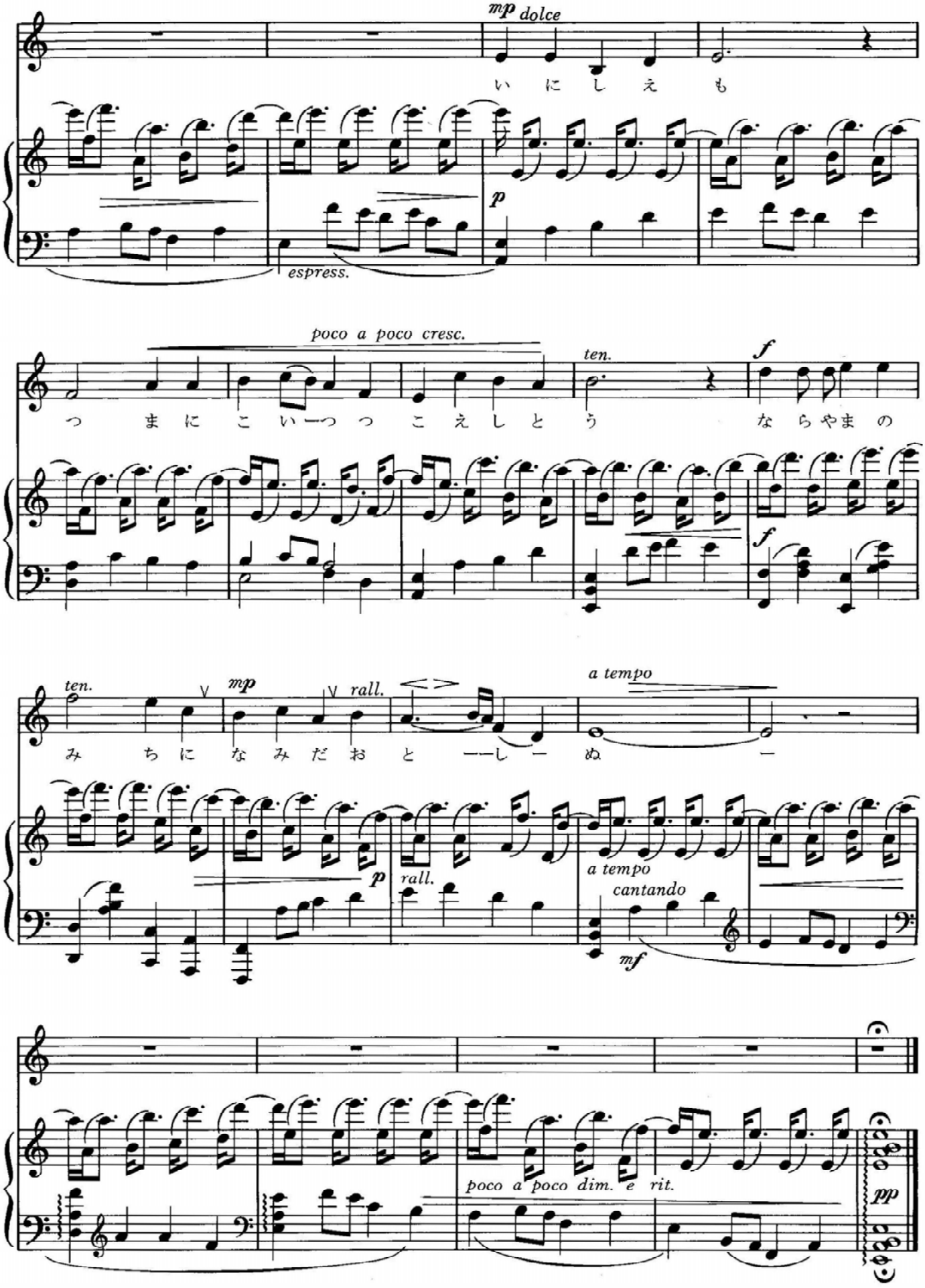
平城山（ならやま）

北見　志保子 作詞
平井　康三郎 作曲



日本古来の音階である陰旋法で書かれたメロディと，筆曲を聞くような趣を持っているピアノ伴奏によるこの曲は，短歌にぴったしのいにしえの平城の都を偲ばせる静かな気品に溢れた歌曲である。平井康三郎が東京音楽



学校ヴァイオリン科に在学中の昭和10年5月の作曲だが，一般に知られだしたのはむしろ戦後の23～24年頃からである。この短歌，第一節は作歌者が恋する人を思いつつ，奈良の小高い丘辺をさまよう悲しみを表現している。第二節は仁徳天皇とその妃の磐之媛（いわのひめ）皇后にまつわる奈良朝時代の皇室の悲恋物語に同情している。